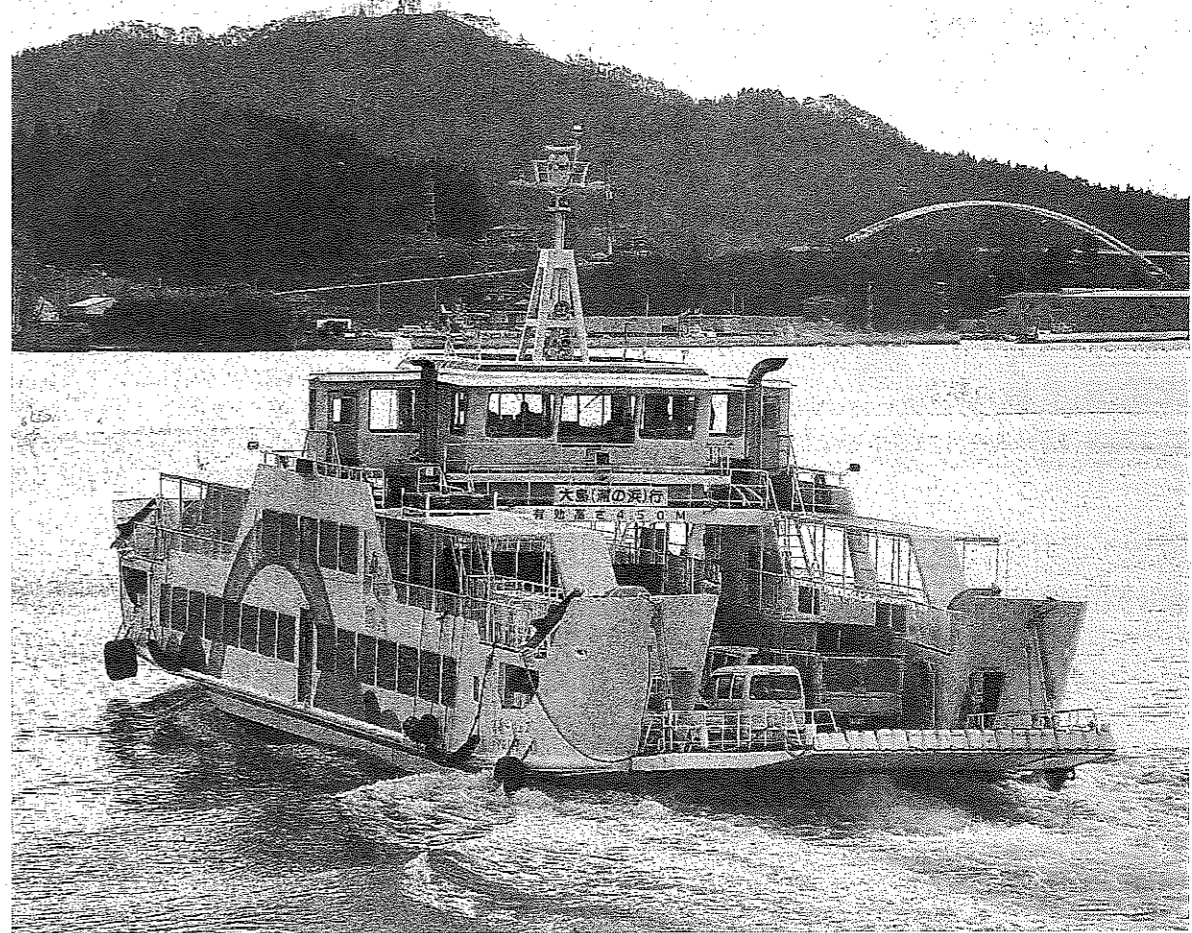


南町～ 浦の浜

110年の「航跡」残し



内湾地区から大島へ向かうフェリー。この光景も見納めになる

今春ラスト運航へ

大島大橋供用で役目終える

東北最大の有人離島・気仙沼大島への旅客船の歴史は、1906(明治39)年までさかのぼる。個人の手漕船に始まり、発動機船、鋼鉄船、フェリーなどと姿を変え、幾度もの経営危機を乗り越えて、島の歴史と共にあり続けた。春に予定している大島大橋の供用開始とともに役目を終える。これまでの「航跡」をたどった。

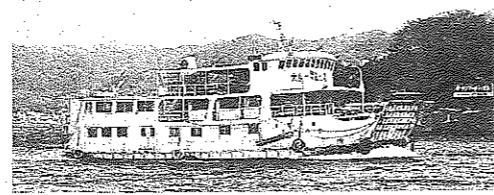
(熊谷耕平)

海上交通がまだ未発達を、片道2時間かけて達だった06年、個人3人が県知事の渡船業許可を得て、手漕ぎ船で創業。「島千軒」と、多くの世帯が喜らした大島から本土までの約4海里(7・4キ)

先達だった。39年からの第2次世界大戦中は燃料や乗組員不足、利用者減少で経営を圧迫。燃料に「イワシ」油などを使う

環境下で、機関が動かず運航や欠航が頻繁にあった。43年には、事業者で大島汽船組合を設立して航路を統一、共同運航となった。

大島汽船が誕生。船の修復や建造費用の負担が重く、経営合理化を目指して大島汽船株式会社が誕生したのは、48年のこと。



初のカーフェリー「かめやま」



大島汽船のマーク

「航路は道路と同じ。島民の生活に支障を来さぬように毎日、本土とつながることが誇りだ。震災後に運航を再開し、島に人、車両、物資

感謝の気持ちあふれ

大島汽船 白幡昇一社長



記念誌を手に取る白幡社長

を運んだ時は「われわれにしかできない」と心が震えた。市民、観光客らに利用されたことを思う。大島航路は、先人の時代から数々の苦難を乗り越えて守り、ウミネコにエサをあげたこと。懐かしさや感謝の気持ちがあふれることも告げなければならぬ。「大島航路が良き思い出として、皆さんの心に残ってほしい」と語り、ラストクルーズが「いい」と強く願う。

震災乗り越え再開

復旧・復興に貢献

平成時代にはバブル経済が崩壊し、観光客や大島地区人口の減少で経営悪化が進んだ。2003年には、市が旅客船事業を廃止。大島汽船と市で「大島航路旅客船事業の第三セクター化」に係る覚書きが締結され、航路た。唯一の事業者となった。11年の東日本大震災

復旧・復興にも大きな役割を果たしてき

その後、復興のリーディングプロジェクトとして大島大橋の建設

が具体化する。供用後は航路の赤字経営を免れないことなどで、誇りある事業の廃止を決断した。

白幡社長は「最後まで安全に乗客を送り届け、有終の美を飾りたい。多くの人が利用し、思い出を振り返ってくれば」と話す。同社では今後、遊覧船事業を継続するとともに、船を活用した新事業、他団体との連携などについて多角的に検討していく。

- 1906年 県の渡船営業許可を得て手漕船で創業
- 16年 発動機船の営業開始
- 18年 浦の浜航路定期運航開始
- 43年 大島汽船組合が設立
- 44年 大島汽船運航会に改称
- 48年 大島汽船会の6隻で大島汽船株式会社を設立
- 59年 定期航路を二分(浦の浜、松岩、気仙沼、要害、気仙沼)
- 65年 初の鋼鉄船「おおしま」を代替建造
- 67年 気仙沼、浦の浜、小瀬で定期航路事業開始
- 70年 「かめやま」でフェリー事業を開始
- 74年 商港営業所開設
- 84年 浦の浜に本社社屋建設
- 92年 初の両頭型フェリー「フェリー大島」を代替建造
- 99年 気仙沼営業所開設
- 2003年 気仙沼市が旅客船事業を廃止、唯一の運航業者に
- 06年 創業100周年
- 11年 東日本大震災で船が流失。フェリーの無償貸与を受けて営業再開
- 18年 大島汽船が